

事後評価報告書

(日本－中国研究交流 研究領域「水質汚染対策技術」)

1. 研究課題名：「湖沼の溶存有機物がたどる運命：特に、有機物負荷・汚染について」

2. 研究代表者名：

日本側：国立大学法人 京都大学生態学研究センター、教授、中野 伸一

相手側：Chinese Research Academy of Environmental Sciences, Professor, WU Fengchang

3. 総合評価： B

4. 事後評価結果

(1) 研究成果の評価について

閉鎖性水域における有機物の消長について、フィールド調査によって定量的に提示するだけでなく、そのメカニズムについての解明がなされており、今後の流入汚濁負荷や水質管理に対する有用な知見が得られている。その成果が実際の環境行政に反映されつつあり、基礎研究にとどまらない、社会実装への取り組みがなされている点は高く評価できる。国際誌 10 編を含む 12 編の原著論文が出ており、そのなかで 2 件は当該分野トップレベルのジャーナルであり、学術的アウトプットとして顕著な成果を挙げているものの、国際共同研究先との共著論文がないため、交流事業の成果として疑問が残る。

(2) 交流活動の評価について

2012 年から 2014 年の毎年、太湖の調査を日中共同で実施し、日本側の若手研究者も調査に参加しているが、世界有数の富栄養湖を体験できたことは若手研究者のキャリアにとって有益であった。一方で、研究期間終盤に中国側からの 29 日間の訪日があるものの、ほとんどの交流はシンポジウム参加や研究打合せといった 1 週間以内のものであり、より長期間の実質的研究交流を進めることにより、共同の成果につながったのではないだろうか。

(3) その他

本事業の後継プロジェクトのための予算獲得に努めていることから、相手側との研究交流の増加・持続的発展の可能性は高いと言える。当初予定の相手先研究機関に留まらず、必要に応じて中国側地方自治体(無錫市環境観測センター)も巻き込んだ取り組みがなされたことは高く評価できる。